

なくそう貧困。命の水を！

# アジアネット

JAFS

NEWS & REPORTS 2018年秋

135

特集 自立への道歩むインドを訪ねる







since 1979  
公益社団法人アジア協会アジア友の会  
Japan Asian Association & Asian Friendship Society

# JAFS

## ● 主な目次 ●

「巻頭言」アジア・太平洋にファンを増やせ 02

特集＝自立への道歩むインドを訪ねる

貧困に立ち向かうアジアユースサミットの若者たち	04・05
村の病院、医師常駐に費用の厚い壁	06
つくっても流せないトイレ事情	08・09
「海外からの報告」フィリピン	11・12
フィリピンで植林10万本を達成	12・13
インドネシアの島の植林活動	14
サイクル・エイドで生活・環境を改善	15
ロンボク島地震へ救援・支援を	16・17
熊本地震支援を終えるにあたって	17
井戸寄贈報告	18～23
親から子らへ「土水」35周年	24
映画「セカミズ」撮影進む	25～27
「JAFS プラザ」＝国内の活動	28・29
チャリティー・チェロコンサート 他	
新入会員紹介・領収報告	30・31
「里子の笑顔」「アジアの友から」	32・33
「新・The 社会貢献」法人会員紹介	34
「環境コラム」	35



## アジア協会アジア友の会とは

アジア18カ国に井戸を贈る国際協力団体 (NGO) です。1979年に大阪で設立。誰もが生まれてきて良かったと思える社会を目指し、井戸建設 (累計1949基) や植林 (累計253万本)、子ども教育支援を中心に活動しています。

全国都道府県認可の社団法人取得第1号団体です。2012年4月1日からは、内閣総理大臣の認定を受け、公益社団法人になりました。

海外との交流・協力活動は、インド、インドネシア、バングラデシュ、タイ、マレーシア、フィリピン、スリランカ、ネパール、韓国、カンボジア、シンガポール、ミャンマー、ラオス、中国、ベトナム、モンゴル、パキスタン、アフガニスタン、さらに西アフリカのブルキナファソにも広がり、友情のネットワークが形成されています。

日本国内でも、各地でチャリティープログラム、自然環境プログラムなどを行っています。

※ホームページ <https://jafs.or.jp>

## 本会へのご寄付は、寄付金控除の対象です

JAFSは内閣府より公益社団法人としての認定を受けています。JAFSへの寄付金や会費 (社員会費は除く) は、申告によって、所得税、法人税、相続税について税制上の優遇措置 (寄付金控除) を受けることができます。

確定申告の際、税額控除、所得控除のいずれか有利な方を選択できます。本会発行の領収書を添付して申告してください。法人税は損金の額に算入することができます。相続税は最寄りの税務署などにお問い合わせください。

## 巻頭言

31年前。「朝日新聞」を辞め、関西経済同友会の常任幹事・事務局長に就任した。間もなく、私が果たすべき役割、課題を考え、私が果敢と中国、韓国との相互理解を深めるための交流」と位置づけた。

## アジア・太平洋にファンを増やせ



萩尾 千里  
アジア協会アジア友の会  
会長

当然のこととして、米国民の対日感情は最悪だった。それを実感したのは新聞記者時代、米務省の招待で訪米した時だった。私の目から捉えた米国の実像を見てくださった。さすが米国は懐が深いと感銘を受けて訪米した結果は、各界各人の強い反日感情だった。「戦争に勝ったのは米国だ。それが今は逆転している。いずれ日本は報復を受けるだろう」とまで激言するジャーナリスト、役人までいた。土足で踏み込んでくる日本に対して、米国は強い怒りを抱いていると同時に、自信を失っているようにも私には映った。

一方、中国はというと、貧困にありでいた。それでも、日本に学んで経済発展を遂げようと、国家挙げて必死だった。とはいえ、本当に中国が経済発展できるか疑問視されていた。

両国とも、当時の日本から見れば老大国に違いなかった。だが、米国は腐っても鯛。いずれ復活するだろうし、安全保障上からも日本にとって重要な国。かたや中国は、時間はかかるが、いずれそれなりの経済発展はするだろう (ただし、こんなに早く高度成長するとは思っていなかったが)。それに地政学的にも友好関係を強める必要がある。

民主党に影響力のあるボーゲル名誉教授と、国務次官補、国防次官補を務めたジョセフ・ナイ名誉教授は、ほぼ欠かさずことなく出席。お互い遠慮のない議論を尽くしている。中国とは、私が関西経済同友会事務局長を辞めてから交流は途絶えているが、その時の私の個人的人脈は続いている。

## ● プロフィール ●

はぎお・せんり  
1960年関西大学商学部卒。  
朝日新聞編集委員、関西経済同友会常任幹事・事務局長、大阪国際会議場社長を経て、大阪国際フォーラム会長。2010年よりアジア協会アジア友の会会長。

**JAFS 会員綱領**  
私たちは、世界の平和と人間の基本的人権を守るために人々との「友情と信頼」に基づく「理解と協力と連帯」の輪をアジアと世界に広げます。

- 一、より人間らしい地球社会の創造をめざします。
  - 一、アジアと世界の人々の幸せに奉仕します。
  - 一、地球の自然環境を大切に守ります。
  - 一、生活の無駄を省き、地球資源を大切にします。
  - 一、これらの奉仕活動を通して、自分と他人の生命の価値を高めます。
- 以上



# 貧困に立ち向かう若者たち

## インドのアジアユースサミット参加者を訪ねて

6月下旬から約2週間、アジア協会アジア友の会（JAFS）の会員有志4人が、インドの提携団体を訪問してその活動をつぶさに見学しました。JAFSが11年前から取り組んでいるアジアユースサミット（AYS）に参加した若

者たちが活動する現場や、JAFS里親の会が教育支援をしている里子らも訪問しました。AYS参加者たちが貧困救済や教育の現場でひたむきに活動に取り組む姿を見て、「貧困に立ち向かう勇氣と情熱」に感動しました。

## 養鶏・教育・人権：大地に根付いて

一行はJAFS会員の渡部高明さん、田中壽美子さん、高田晃宏さんと私。6月26日から7月8日まで、インドのマハラシュトラ州ガッチロリ県ナグプール市、カルナータカ州ビジャプル市などJAFSの提携先3カ所のNGOとその活動現場を訪れ、さらにAYS参加者3人、JAFS里親の会が教育支援している里子3人も訪問しました。

### 賞金で300羽を購入

その中で最も強く印象に残ったのは、AYS参加者たちの成長ぶりです。その1人、ガッチロリ在住の女子

大生、ケタキ・デオゲードさん（21）は昨年の第5回AYSで「養鶏による青少年の雇用と食改善」というプロジェクトを提案しました。彼女はJAFSの提携先NGOである、ガッチロリのRUDYAから推薦されました。「養鶏による青少年の雇用と食改善」事業の対象はガッチロリ郊外のマハラ村の少数民族の青少年。高等教育を受ける機会が少なく、働き先も少なくて困っています。そこに養鶏の仕事を与えれば、雇用を生み出せる。卵と鶏肉を売って利益を得る。さらに、養面も改善できる。まさに「一石三鳥」の取り組みです。この提案でケタキさんはAYSで優秀賞に輝きました。賞金は300ドル。この賞金で300羽の鶏を購入。ガッチロリ郊外



▲ノートパソコンを使ってパダトラ小学校の子たちに授業をするスネハル・ピパレさん（右上）＝6月、マハラシュトラ州ガッチロリ県パダトラ村



▲ノートパソコンを使ってパダトラ小学校の子たちに授業をするスネハル・ピパレさん（右上）＝6月、マハラシュトラ州ガッチロリ県パダトラ村

の貧しい若者たちに15羽ずつ分け与え、養鶏事業をスタートさせました。マハラ村は人口350人。古来、聖霊を信仰。「モハ」という木の実を収穫して生活の糧にしています。実からは油（灯油）をとり、花は干してそのまま食べます。自給自足の生活で、仕事らしい仕事はありません。

6月29日、この村を訪れました。養鶏に取り組んでいるある若者は卵や鶏肉を売って得たお金でさらに200羽の鶏を買って事業を拡大しました。事業はおおむね順調ですが、中にはうまく育てられずに元の15羽が9羽に減ったケースもあります。ケタキさんは鶏小屋の構造上の欠陥を指摘するなど立派な指導者ぶりを発揮していました。第2のステップとして新たに10人が養鶏事業の対象者に選定されました。AYSでの提案が単なる机上プランに終わらず、インドの大地に根付いて大きく羽ばたこうとしていることに、感動しました。

### 子どもにパソコン授業

2日後、ガッチロリから2時間のパダトラ小学校を訪問。パダトラ小学校は少数民族の子どもたちが教育を受けられるようにと、2001年にJAFSの協力で設立された小学校です。ここでは、第3回AYSに参加したスネハル・ピパレさん（25）が、ケタキさんや大学生の仲間数人とノートパ

ソコン数台を持ち込んで子どもたちに特別授業をしていました。コンピュータを知らないへき地の子どもたちに使い方を教えるのです。コンピュータで何ができるのか。色鮮やかなコンピュータの画面に、子どもたちは目を輝かせていました。「教育から未来への発展があり、貧困からの脱出も叶えられる」。そう信じて授業に取り組む大学生たちの姿は感動的でした。

7月2日に訪問したナグプールで出会ったビシャル・パランジャペさん（30）もAYSの参加者。亡き父フィリップさんが運営していた、スラムの子どもたちを支援するチャイルドアカデミーを引き継いで活動しています。今はAYSのコーディネーターとして若者の育成に力を注いでいます。地域で貧困救済や人権擁護に取り組む若者たちのリーダー的存在です。

出会った若者たちに共通しているのは、貧困に立ち向かう勇氣と情熱です。それはAYSで大きくはぐくまれたのです。AYSの果たしてきた役割の大きさを初めて知った思いでした。インドの発展はこの若者たちによって叶えられるのではと希望を持ちました。人が育つには時間がかかります。今後、アジアユースサミットの果たす役割はますます大きくなっていくことでしょう。

（編集スタッフ 大本和子）



# 医師常駐に費用の厚い壁

## 週1日診療のサティ病院



母親に連れられて来院した子を診察する医師。週に1度の診察日には、治療を求める人々が次々に訪れる＝6月28日、マハラシュトラ州ガッチロリ県ムスカ村のサティ病院

今回のインド支援先見学ツアーで最初に訪れたのは、マハラシュトラ州ガッチロリ県ムスカ村にJAFSの支援でできたサティ病院です。

外観は「これが病院？」と思わせる普通の民家です。院内の設備も診察台など最低限のものしかありません。それでも週に1度、医師が診療してくれるというのは住民たちにとって大きな安心です。

診察代と薬代を合わせた患者負担は10<sup>ルピー</sup>(約16円)。病院の運営費は6割がJAFS第1エリアからの寄付と「連合(日本労働組合総連合会)の愛のカンパ」によって賄われ、地元負担は4割です。

医師の診察は触診や投薬、簡単な外科手術。患者の生活改善の指導をします。超音波検査機のような検査機器は一切ないので、精密検査や本格的な手術には60<sup>ルピー</sup>以上離れた県立病院を介するしかありません。

私たちがいた1時間ほどの間でも、患者が次々とやってきました。半年前から腹痛が続く女性、貧血の女性、かぜの男児、バイクで転倒して手が上が

らなくなった男性、2日前から水様下痢が続く女性……。それぞれに治療を施し、バイクの男性にはリハビリ指導をしていました。

病院ができる前、病気の村人たちは霊媒師に頼っていました。今、近代医学の恩恵に浴しています。日に10〜20人程度の患者がやってきます。

村人たちは医師の常駐を望んでいますが、いつでも診てもらえるわけではなく、急な病気には対応してもらえないからです。60<sup>ルピー</sup>以上離れた県立病院に患者を運ぶための救急車も必要です。まだまだ多くの課題があります。

病院側は、これらの課題を解決するため、村人から集めている病院運営費の値上げ、10<sup>ルピー</sup>の診察代を30<sup>ルピー</sup>にするなどの増収策を考えているということでした。しかし、常勤医を雇うには、費用が年約100万円かかります。貧しい村民たちには過大な負担です。

現状の改善に、私たちが少しでも支援できないものかと考えさせられました。

(JAFS会員 渡部高明)

## 現地との深いきずなに触れた

### 子どもの笑顔を守る責務を実感

JAFSと提携しているインドのNGOとのかかわりや活動を、実際に自分の目で見て今後の活動につなげたい――そんな思いで今回のインド訪問に参加しました。

6月26日、空路、南部のベンガルールに降り立ち、翌日、中部の都市ナグプルへ。そこから車で5時間かけて最初の目的地・マハラシュトラ州ガツ

チロリに到着。4日間、JAFSの提携団体RUDYAの代表のカシナートさんの案内でRUDYAのプロジェクト先(ムスカ村の病院、養鶏、RUDYA信用金庫、パダトラ小学校)を見学し、貧しい人たちへの支援活動について学びました。

その後、ナグプルに移動して現地のNGO代表や地域で活動する若者た

ちの集会に参加し、JAFSが支援するチャイルドアカデミー見学

(実際には建て替え工事のため更地になっていました)と、同アカデミーが実施するスラム家庭への生活用品配布に同行しました。

その夜、12時間のバスでベンジャプルへ移動。JAFSと現地NGOのBSVIAとで設立した日印友好学園コスモニケタンに滞在しました。そこでの3日間は、授業やスポーツイベント見学、生徒たちの住む村の見学と



日印友好学園コスモニケタンの生徒と一緒に記念植樹する筆者＝7月4日、カルナータカ州ベンジャプル

家庭訪問、先生たちとの話し合いなど、盛りだくさんの内容でした。帰路は15時間の夜行列車でベンガルールへ。13日間のインド訪問は、日本列島縦断に匹敵する道程となりました。

滞在先では、支援事業やプロジェクトを視察・参加するだけでなく、夕食後に現地提携団体の方々にナクサライト(インドの極左武装勢力・共産主義グループ)による被害や、影響力のある少数民族が多く住み、貧しい生活を送っているマハラ村での問題点、取り組み、そして将来性について話を聞くことができました。

実際にインドを訪れ、懸命にプロジェクトを全うする方々の姿を見て、支援活動・国際協力には特別な技術や能力が必要ではなく、問題に対する深い理解と様々な工夫やネバリが大切と感じました。

インドで自分の目で様々な事を見て体験して、JAFSと現地提携団体の関係の深さに触れることもできました。この経験をより多くの人たちに伝えたいと思います。

国内でできる支援活動もたくさんあります。例えば募金活動を行ったり、イベントに参加するなど。もっと身近で簡単なことから、誰もが支援・協力できるものがあります。

アジアの子どもの笑顔を守るのは、JAFSメンバーの責務であります。

(JAFS会員 高田晃宏)

## 鍵盤ハーモニカを届けました



2017年春発行の本誌第129号で、インドの日印友好学園コスモニケタンの生徒たちのために鍵盤ハーモニカの寄贈をお願いしたところ、これまでに7台が寄せられました。ホースと吹き口を新品に交換。ほかに寄せられた2本の縦笛とあわせて7月6日に届けました。写真。同校には鍵盤ハーモニカを演奏できる先生もいて、「これだけあれば、子どもたちにレッスンできます」と喜ばれました。

ご寄贈いただいた皆さまに、お礼申し上げます。

(編集スタッフ 大本和子)



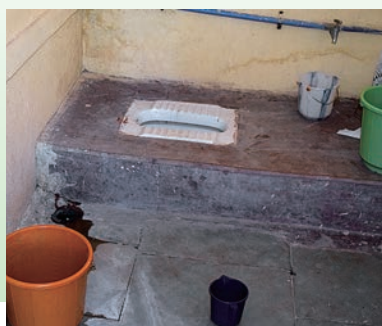
## 「戸外でする」習慣が地下水を汚して伝染病

「インドでは4億人がトイレのない暮らしをしている」。そんな番組を昨年、日本のテレビで見ました。今夏、私が訪問した日印友好学園コスモニケタンの里子たちの家庭も、同じ状況下に置かれています。里子の記録には「トイレは家になく森に行きます」と書かれています。ヒンズー教が排せつ物は不浄とするため家にトイレを設けない、という理由もあるようです。

インドの村では、ペットボトルを下げて木陰に向かう女性の姿を目にするという話を聞いたことがあります。紙は使わないのです。その結果、排せつ物が地下水を汚して伝染病の原因になり、暗い森での女性のレイプ被害も多く報告されてきました。

インドでは、借りるには勇気がいるようなトイレも多いのです。使えるトイレが訪問先にあるか。それが大きな心配事です。移動の途中では、トイレそのものが見つかからないことも多いです。パダトラ小学校には、JAFSの理事が贈った「タンクのついた洋式水洗トイレ」があります。現地で見えたときは感動しました。

こんな状況を改善しようとインド政府は今、トイレ建設に力を入れています。村に数カ所、誰でも使えるトイレを



コスモニケタンの客室のトイレ

## 女性のレイプ被害も多発

## 政府が家庭に設置を進めているが



建設している場面も、そのテレビ番組で紹介されてきました。私たちが訪れたムスカ村でも、2年前にゼロだったトイレが90%の家庭に設置されたということでした。トイレの建設資材は政府から支給され、村人たちは仲間の協力で各家庭につくるのです。母屋とは別につくりやす。見学させてもらったトイレは清潔なものでした。同右。

問題は、トイレの水洗用に使えるだけの水を確保できるかどうかです。ムスカ村で実際に使われているのは、設置されたうちの70%だという話を聞いたとき、狭いトイレで用を足すより、慣れた戸外のほうが広々しているのかもしれないと、勝手な想像をしました。そうではなかったのです。

数日後に訪問したコスモニケタンの近くの村では、トイレのある家が見当たりません。コスモニケタン理事長のナンデーニ・クンパールさんは「トイレに流す水がないのです。だから家にトイレをつくらうとはしません」と説明してくれました。

この地方では、雨期だというのに雨がまったく降らない日々が続いていました。さらに、電力不足で井戸の給水も夜間の5時間に限定されています。貴重な水をトイレに使うわけにはいかないのです。インドの家庭で当たり前前にトイレで水が流せるようになる日は、すぐには来そうにありません。(編集スタッフ 大本和子)

## 日照りに電力不足一水は貴重で水洗に使えない



インドの貧困層の若者たちの雇用促進を目指す、IT都市として有名なバンガロールにJAFSが職業訓練学校を建設中です。現在、事務局スタッフの横山浩平が現地に駐在して事業実施にあたっています。写真、白いシャツの人。5月に中間報告のために現地視察をしてきました。

## 職業訓練学校の建設、着々

IT都市・バンガロール

場所は、バンガロール空港とバンガロール中心部の中間です。計画を始めた頃に高速道路が完成し、現在は空港からわずか20分のところでも良い立地にあります。周辺はまだインドの下町の雰囲気が残っていますが、あと1年もするとかなりスマートな雰囲気をかもし出

す地域に変わるに違いなく感じました。と言うのも、空港のすぐ近くにはアメリカの某大企業の巨大事務所の建設が決まり、また、この職業訓練学校の前には日本のタクシー会社の整備工場が建設中だからです。海外企業がここバンガロールを拠点に、インドから世界に向けて事業展開に拍車をかけている様子でした。

そんな中で、職業訓練学校の建設は、現地の作業員たちにより、地道に行われています。メインになる教室とドミトリイ(寮)の棟は完成し、生徒たちが使うトイレやシャワー室もでき上がっていました。ちょうど、台所の建設中でした。

実際に建設していくと、紙に起こした設計図通りにするには不都合があることがわかって、変更を余儀なくされることもあるようでした。提携団体AFSバンガロールは本会にとって、大きなプロジェクトを初めて一緒にする団体です。本会スタッフが駐在することで、良いコミュニケーションを図ると同時に、プロジェクト1年目の基礎を固めている様子がかえりました。

これまでのインドのイメージを払拭する都市バンガロールで職業訓練を行う場所を持つことの意味が、現地を訪れて実感できました。新しい感覚を持って将来に確実な何かをつかめる若者を育てる。新しいインドへの一歩につながると感じました。

(JAFSスタッフ 熱田典子)

## バスの下がボクらの食堂

コスモニケタンのランチ風景



日印友好学園コスモニケタンに通う生徒たちは、昼食にお弁当を持参します。お弁当箱はアルミ製の丸い二段重、三段重です。中身はカレー(日本のカレーとまったく違い、様々な野菜を多種のスパイスで煮込んだものやスープ)とチャパティ(イ

ンドのパンの一種)やご飯です。午前の授業が終わって昼食時になると、生徒たちは屋外の木陰などに集まります。スクールバスの車体の下は、強い日差しを避けられるので、格好の食事場所になります。写真。(大本和子)



# People-to-people partnership for Mangrove Reforestation in Matnog Sorsogon, Philippines, 2014 – 2018

Gina A. Yap

President of AFS-Sorsogon, Philippines

Planting mangrove was initiated in 2014 as a friendship project of Japan and the Philippines through Japan Asian Association and Asian Friendship society (JAFS) and Asian Friendship society (AFS) Sorsogon Chapter in response to the threat of global warming and increasing frequency and intensity of disasters as shown by the impact of super typhoon Haiyan that hit the Central Philippines in Nov. 2013 with staggering casualties. In the case of super typhoon Haiyan, the presence of mangrove forest was observed to have mitigated the impact of storm surge in many places. Thus, the partner communities for the project have welcomed the idea of planting mangroves. In addition to disaster mitigation, JAFS wished to contribute to sustainable livelihood of poor people who depend on the sea for food and income.

To support the project, JAFS mobilized to do mangrove work camps in Matnog. In 4 years, the project is able to reach its target of 100,000.

A total of 8 communities participated, with AFS Sorsogon-UMD doing the local organizing work and hosting the work camps. For many Japanese participants, the camp was also an eco-tourism experience - sampling local food, exploring pristine tropical islands and plants, and get to know the simplicity of life of the locals.

**Success Story:** Paghuliran - the Municipal Government of Matnog has recognized Barangay Paghuliran as a model for mangrove forest community stewardship and representatives from the Department of Environment and Natural Resources (DENR) and related agencies have been visiting the barangay to see the mangrove reforestation site. Local residents are proud and happy.

With experience, AFS Sorsogon has learned to identify suitable areas for planting and have already tried appropriate method of growing given the particular situation of the local ecosystem, local environmental leadership and people's attitude. Success rate is observed to be dependent on tidal pressures (location), care and protection, and cooperation of sea food pickers and fishermen. The ownership of the planting site remains with the community and local co-operators who



## 外国人と一緒に活動することを誇りに

care for the mangroves.

Mangrove forest is categorized as "blue carbon sink" by climate change advocates as scientists revealed that more than 80% of carbon in the planet circulate in the ocean and mangroves and other marine ecosystem in general could capture carbon more than trees planted in land (UNEP Blue Carbon Initiative, 2016). For marine creatures the mangrove forest is a spawning area and a refuge from harsh heat and tidal stresses while for most people in the coast, mangrove forest in the Philippines, it is a source of firewood and baby crabs for sale to crab growers. Global warming, coral bleaching and more expanding tides are simply considered as part of life by the locals.

Mangrove reforestation activities increase awareness and curiosity of local people of the other services of mangrove forests. They are more encouraged to take care of the mangroves when people from other places would take the effort to plant and support the project. They also feel happy and proud when foreigners would come and work with them, because their visits also break the monotony of life in their small village. In the future, it is hoped that more awareness is created on the importance of mangrove forest not only for the local residents but specially for the planet. In the end however, the slowing down of global warming still depends on slowing down carbon emissions, and transforming the way humans live.

▲10万本目のマングローブを植えた後でワーク参加者と村人の記念撮影=5月、ソルソゴン州

このプロジェクトの対象となるソルソゴン州マトノグでは、マングローブ植林のアイデアを歓迎しました。一方、JAFSは、災害緩和だけでなく、食糧と収入を海に依存しているこの地域の貧しい人々の、持続可能な生活向上に貢献したいという願いを持っていました。

このプロジェクトを支援するため、JAFSは多くのワークキャンプのグループを動員し、18年5月に10万本のマングローブを植林するという目標を達成しました。AFSソルソゴンUMDは地元を組織化しワークを受け入れ、全部で8つのコミュニティが参加しました。多くの日本人参加者にとって、キャンプは地元の食材を体験し、開発されていない熱帯の島々や植物を探索し、地元の人生のシンブルさを知るエコツーリズム体験でした。

**成功事例**・マトノグ市政府は、植林地の一つであるバグリラン地区を、「マングローブ林を地域が資産を受託管理するモデル」として認め、環境天然資源省(DENR)の代表者や関連機関が植林現場を見るために地区を訪れています。地元住民はともそのことを誇りに思っています。

AFSソルソゴンは、経験を重ねることで植林に適した地域、地元の生態系の特定、地元の環境リーダーシッ

プ、人々の態度などを考慮して最善の方法を取ることができるようになりました。植林の成功率は、波の強さ(場所)、ケアと保護、漁民がどれだけの協力的かなどによって変わってくるものが分かってきました。

マングローブは、陸地に植えられた木々よりも炭素をより多く吸収します。またマングローブ林はカニやエビ、小魚の産卵地であり、猛暑と強い波のストレスからの避難地にもなり、漁業資源の供給源となります。

マングローブ植林活動は、地元住民たちにマングローブ林を使った他のサービスができないかという考えを気づかせ好奇心を高めています。住民は、外国人がマングローブを植え、努力してこのプロジェクトを支援しているのを見て、自分たちが世話しなければという強い気持ちになっています。住民たちはまた、日本人の訪問によって単調な小さな村の生活が活性化され、外国人と一緒に活動することを誇りに思い幸せに思っています。将来は、地元住民だけでなく、特に地球にとってもマングローブ林の重要性についての意識が高まることを期待しています。しかし、最終的に地球温暖化の速度を下げるのは、炭素排出を減速させ、人間の生活様式を変えることができるかにかかっています。

(翻訳・編集スタッフ 大本和子)

……海外からの報告………和文と英文でお伝えします

## フィリピン人と日本人の協力によるマングローブ森の再生

マングローブ植林は、地球温暖化の脅威や、2013年にフィリピンを襲った巨大台風にみられるような、災害の頻度や巨大化に対応し、アジア協会(JAFS)とAFSソルソゴンの友好プロジェクトとして14年にスタートしました。巨大台風のと看、マングロ

ープ林がある場所では高潮の影響が少なかったことがわかりました。このプロジェクトの対象となるソルソゴン州マトノグでは、マングローブ植林のアイデアを歓迎しました。一方、JAFSは、災害緩和だけでなく、食糧と収入を海に依存しているこ

AFSソルソゴン(フィリピン)代表 ジーナ・ヤップ



# マングローブ植林10万本を達成

フィリピン、マトノグでのマングローブ植林の状況				
	バランガイ (村)	開始年	植林本数	活着率・その要因ほか
1	サントイサベル ティクリング島	2014	18,500本	20%：高潮による被害。護岸工事時にこの地区の石やサンゴ礁を撤去したことによる
		2015	24,500本	60%：台風による被害と水牛や毛虫により葉を食い荒らされた
2	パグリラン	2015	27,700本	80%：場所が良いうえに住民たちによる良い協力も得られている
3	プルパンダン	2017	10,000本	90%：活着率は高いが観察が必要
4	シナルマカン	2017	5,000本	50%：海水位の上昇による
5	ゲナブラン・ オリエンタル	2018	7,500本	要観察。安全な場所だが海水位の上昇による不安あり
6	ゲナブラン・ オクシデンタル	2018	7,500本	要観察。場所は良い
7	カマチラス	2014	現存の森	多種のマングローブの種の供給元
合計			100,700本	

## フィリピン、マトノグ ワークキャンプ4年間の成果

2014年3月にフィリピン、ソルゴン州マトノグで、マングローブ植林ワークキャンプがスタートしました。その後、京都暁星高校をはじめ、いくつかのグループによるJAFSワークキャンプが同地で行われ、植林と村人たちの交流を重ねてきました。そしてついに、通算12回目となる18年5月に実施したワークキャンプで、目標としていた10万本の植林を達成しました。

マングローブ植林は高波の被害から陸地を守り、二酸化炭素(CO2)を吸収するなど効用が多くありますが、JAFSとしてはこの地での植林は、マングローブ植林が小魚やエビ・カニなどのよい棲みかとなることから、貧しい漁民に良い漁場を与え、生活向上を図ることを大きな目的としていました。

今回のワークでは、住民たちと一緒に残る1万本を植えることのほかに、過去に植えた苗のクリーニング(苗の成長を妨げる苗からまった藻などを除去する作業)と、今までの植林地を訪問して生育状況をモニタリングするという2つの目的がありました。

ここでは、今までに植林した地域の成果について報告します。

上の表のように、7つのバランガイ

(村)が参加しましたが、活着率は20%から90%と大きな幅があります。

最初にこのプロジェクトに参加したのはサントイサベル村です。バランガイキャンプのジョエルさんは毎回、私たちのためにボートを自ら操縦し、誰よりも熱心に種を植えていました。

高波の被害や護岸壁工事の影響で活着率が低いのですが「マングローブ植林にカニやエビ、小魚が棲みつくようになれば村人の生活支援になると思っています。すでにマングローブ植林には魚が卵を産み付けている」「村人は、最初は関心を持たなかったが、ワークキャンプが毎年行われることで村人の意識が変わった」と話してくれました。

さらに、「いい道ができたので、外から人々が来て、ジョギングしながらマングローブの景色を楽しめるようになった」と将来の村の発展に期待を寄せていました。彼はこのプロジェクト終了後も引き続きこの活動を続けていくと意気込みを話してくれました。

一番活着率の高いのはプルパンダン村で、90%です。1年でこんなに成長するのかと驚くほどの背の高さまで伸びていましたが、近づいてみると、どの苗にも藻がびっしり絡みついています。日頃の手入れがなされていないからです。

参加者はすぐに藻の除去作業に着手しました。自分たちが昨年植えただけに、いとおしさもひとしおです。植林



⑤2016年にした植林作業。何も生えていない海辺の湿地だった  
⑥同じ場所に現在、苗木が一面にしっかり根付いて育っている  
＝ソルソゴン州マトノグのパグリラン村



というのは植えた後のメンテナンスが重要です。藻が絡まったり、害虫がついて葉を食い荒らしたりします。クリーニングしなければ苗がうまく育ちません。今まで天然のマングローブ植林しか知らなかった住民たちには、手をかけて育てていくという考えはなかったのではないかと思います。だがその作業をするかという問題もあるでしょう。私たちは時間の関係で全体の半分だけ除去作業をしました。

翌日バランガイの選挙を控えているため(フィリピンの選挙では票の奪い合いで殺人にまで発展するほど住民は熱くなります。村人たちにとって「植林どころじゃなく」、参加者は少ないのです)、多忙を極めるバランガイキャンプが、少しの間顔を見せにやって来られたため、クリーニング作業をお願いしておきました。「どのようにやればよい?」と聞かれたため「私たちがしたところを見ていただけ

ればわかりますよ」と答えました。この3週間後、現地コーディネーターのジーナさんに「すべての苗のクリーニングをした」と、写真を添えたメールが入ったそうです。

今回の見学で最も感動したのはパグリラン村です。2年前にマングローブの種を植えた場所では見事に根付き、30〜40センチ成長していました。今回のワーク参加者の多くがこの場所で植えた経験を持っていたため、全員が感嘆

の声を上げました。「自分たちの植えた種がこんな風に育っていくのだ」というさまを目の当たりにし、涙が出るほどうれしかったです。

手入れもよくなされていて、その場所の後方には4年前に植えられたものが整然と並び、案内してくれた責任者と思しき男性も、根が3本、枝も3本ある立派な木に育っているのを、私たちに誇らしげに見せてくれました。右手には3、4年前に植えられた木々が成長しており、数年後には立派な林になっているでしょう。この村は政府から「補助金を出すのもっとマングローブを植えないか」と打診されたのですが、「これ以上植えると漁船が通れなくなる」と断ったそうです。

4年間たった10万本植えただけでなく、住民たちの意識は確実に変わりました。「こんなへき地に日本人がやってきて、住民たちと一緒にマングローブを植えてくれた」ことは村人たちの環境保護の意識を高め、自分たちでもっとやっという思いを持たせたのです。この地域にはフィリピン国内のグループも来て植林するようになっていきます。

私たちが植え、住民たちがそれに引き続いて植えたマングローブが、5年後には大きな森を形成しているでしょう。その森を見に行きたいものだといから楽しみにしています。

(編集スタッフ 大本和子)





## サイクル・エイドで生活・環境を改善

### タイ、ラーチャブリー県 委員会つくり観光開発も

日本の再生自転車を必要としている地域に贈るサイクル・エイド事業。タイのラーチャブリー県に350台の自転車が贈られることが決まっています。TAFS (Thai Asian Friendship Society) 代表のシリニーさんの声かけにより、ラジャットハット大学を中心にNGO、地方行政、村人、小中学校、高校の先生、保護者、地元有力者らによる約50名のサイクル・エイド委員会が結成され、人や環境に優しい自転車を活用した地域の生活・環境改善に取り組むこととなりました。

まずは、プロジェクトのための資金作り。メンバーのアイデアでマラソンなどのチャリティープログラムが行われ、多くの市民の協力のもと、3カ月かけて目標金額が集まり、自転車を必要としている子どもたちに届けることができることになりました。

カオピントン学校に通う6年生のウオラヌットさん(12)は、お母さんと2人暮らしで、働くお母さんを助けるために掃除や料理などの家事に一生懸命取り組む優しい女の子です。家は学校から遠いのですが、交通費が払えないため、早起きして歩いて通学していました。自転車を贈られて、暗くて安全とはいえない道を歩かなくてもよくなりました。また、勉強や家事をする時間が増えたととても喜んでいました。

また、地域のコミュニティーワーカーや医療従事者の巡回、貧しい農民や

現地提携団体ホサナ財団のジミー氏が、教会活動を通して、島民が土地や農地の売却して離島を検討していることを知り、相談役として島を訪れ、島に残ってもらう話し合いをしました。自然環境や生物多様性を通して魅力ある島づくりを目指すことで、離島を思いとどまらせました。

17年にARWUの22名が日本人として初めて現地を訪れ、黒檀を1000本植林して交流を深めました。それがきっかけで、エコツーリスト、ダイバー、大学の研究者ら島を訪れる人が少しずつ増えました。今年もARWUとイオンインドネシア社から計27名が訪れ、黒檀と果樹1000本を植えて交流しました。

植林2年目で、目に見える成果はまだですが、村の牧師であるチヌグキ先生は「何の魅力もないと思っていた島に少しずつ人が来て、島の魅力を島民に伝えました。離島を断念したわけではないが、もう一踏ん張りする自信へと、村人を導いていきました」と変化を指摘します。

私たちにできるのは、このような村をもつと探し、足下の環境を守りながら、小さな地域や村でもできる環境保全の方策を、伝えていくことではないでしょうか。訪問や交流ができなくても、ともに取り組むことが、離れていても人の支えになると思います。

(JAFSスタッフ 横山浩平)

委員会では、プロジェクトを通じて形成された地域のネットワークを生かして情報を共有し、地域の他の問題や、困難な状況にある人々を助けるための新たなプロジェクトも立ち上げています。今まで同じ地域に住みながら、あまり接点のなかった富裕層と貧困層が同じ目的に向けて一緒に活動することができ、新しい町づくりの大きな力となってきています。

さらに県内チョーンブン郡では「自転車の町」として自転車を安全に利用できるよう、自転車道や駐輪場を設置する一方、自転車安全講習会を開き、住民が地域の環境を守りながら、生活をより良い方向に改善できるよう、一体となって取り組み始めました。

地域に残る美しい自然を自転車で訪れる新たな観光資源の開発や、自然を守るための清掃や整備などのボランティア活動も広がってきました。自転車をきっかけとして、地域に対する住民の意識が少しずつ変わり始めました。住民の手による未来に向けた持続可能な発展。日本との交流が楽しみなネットワークがまた一つ広がりました。

(JAFSスタッフ 岡本佳子)

◆本事業は競輪の補助を受けて実施しました。

## インドネシアでの植林・貯水池建設活動の状況

年度	事業地	事業内容	植林木数	活着率	受益者数
2013	バドゥアンガス市森林保護区域	植林・交流	5,000本	60%=2回補植後	
2014	トモホン市マハウ山保護区域	植林・交流	2,000本	75%=2回補植後	
2015	トモホン市バスラテン村	貯水池建設・清掃・交流			90世帯、310人
2016	トモホン市バスラテン村	貯水池建設・清掃・交流			90世帯、310人
2017	タリセ島エアバヌア村	植林・交流	1,000本	50%=補植予定	
2018	タリセ島エアバヌア村	植林・交流	1,000本		

※すべて北スラベシ州。植林や貯水池の維持管理は、地元の教会を中心としたボランティアグループがしている



植林に参加した村民とARWUの人たちが一緒に記念撮影 7月5日、北スラウェシ州タリセ島エアバヌア村

## 緑と自然で魅力の島づくり

### インドネシア エアバヌア村の植林活動

JAFSはインドネシア北スラウェシ州で2013年から、植林や貯水池建設などの支援を始めました。低所得層の村を対象に、日本との友好交流を深める活動を通して、村の人たちが自主的に環境保全を継続することを目標に続けています。イオンリテールワーカーユニオン(以下、ARWU)に社会貢献活動の一環としてご支援いただき、同ユニオンとイオンインドネシア社の従業員が村を訪れ、村人たちと植林と交流をともにしています。

上の表がこれまでの活動内容です。その中から、17年にタリセ島エアバヌア村で始めた黒檀と果樹の植林活動を紹介します。

同島は、黒檀林業と漁業が中心の島でしたが、過剰な黒檀伐採によって木々は消え、島の経済力は衰えていきました。現在は、あらゆる原生林の伐採と木材輸出が禁じられ、17年から、再生林のみ伐採・輸出可能の措置がとられています。

小学校、中学校しかないため、高校入学を機に若者は村を離れます。今、島にあるのは、自給的農業と現金収入のための漁業です。

現地提携団体ホサナ財団のジミー氏が、教会活動を通して、島民が土地や農地の売却して離島を検討していることを知り、相談役として島を訪れ、島に残ってもらう話し合いをしました。自然環境や生物多様性を通して魅力ある島づくりを目指すことで、離島を思いとどまらせました。

17年にARWUの22名が日本人として初めて現地を訪れ、黒檀を1000本植林して交流を深めました。それがきっかけで、エコツーリスト、ダイバー、大学の研究者ら島を訪れる人が少しずつ増えました。今年もARWUとイオンインドネシア社から計27名が訪れ、黒檀と果樹1000本を植えて交流しました。

植林2年目で、目に見える成果はまだですが、村の牧師であるチヌグキ先生は「何の魅力もないと思っていた島に少しずつ人が来て、島の魅力を島民に伝えました。離島を断念したわけではないが、もう一踏ん張りする自信へと、村人を導いていきました」と変化を指摘します。

私たちにできるのは、このような村をもつと探し、足下の環境を守りながら、小さな地域や村でもできる環境保全の方策を、伝えていくことではないでしょうか。訪問や交流ができなくても、ともに取り組むことが、離れていても人の支えになると思います。

(JAFSスタッフ 横山浩平)



# ロンボク島地震 救援・支援を！

インドネシア 現地財団から要請

ロンボク島地震の震源地



インドネシアのロンボク島北部と東部で、7月29日にマグニチュード6.4、8月5日にマグニチュード7の地震が発生しました。その後の余震により被害が広がっています。

バリにある本会提携団体のホサナ(Hosanna)財団は、物資支援と医療支援が必要と判断し、インドネシアクリスチャン大学医学部(ジャカルタ)と協力体制を結び、支援をすることにしました。インドネシアでは、現地に提携団体がある団体のみに国際支援活動を許可が下りますが、ホサナ財団が認可を受けて活動しているため、JAFSも現地に入ることができま

す。

同財団のエカ・サントサ氏から現地の被害状況を知らせ、救援・支援を訴える次のような手紙が届きました。

地震により、7月26日までに分かったところで、死者548人、負傷者1477人。病院及び医療センター13院、モスクと礼拝堂が65堂、学校468校が損壊しました。さらに度重なる揺れにより、家屋6万7875棟が被害を受け、27万168人(西ロンボク県6万8946人、北ロンボク県15万8880人、東ロンボク県2万9573人、マタラム市1万2769人)が避難しています。我々は、日頃の仲間のネットワークを活用し、ま



エカ・サントサ氏からの報告に添えられていた、現地の被災状況を示す写真

ず、レナエクゴンダンタン村で支援を始めました。

今後は、救援が手付かずになっている西ロンボク県ナルマダ区の海峡の村を支援する計画を持っています。現地は、1477世帯の6222人が住む中、1385世帯、5340人が被災者です。中重度の被害が900世帯近

くあります。

緊急対応計画として次の4つの柱を立てて支援しています。

食料と水の供給／炊き出し／医療サービス(検診と集団治療。避難所における軽いけが、せき、風邪、発熱、皮膚病、感染症など)／心的外傷の治療(カウンセリング、ゲームや映画上

映などによる緩和ケア)

避難所での感染症をできるだけ早い段階で食い止めるため、大学の医学部と連携しています。現在は、個人を支援することを中心にしています。その後、学校や医療センター、礼拝堂などの公共施設の再建も視野に入れていきます。

## 「なんでもない毎日」へ絶え間ない努力を

### 熊本地震への支援を終えるにあたって

「なんでもない毎日が宝もの」  
益城町のホームページに載っている言葉です。

JAFSは3月末で、熊本の地震被災地での支援活動を終えました。

2016年4月14日と16日の2度にわたる震度7の地震で倒壊、解体された家屋が5500棟にのぼり、2年経った今年2月28日、1261戸の仮設住宅暮らしの方がおりました。

私たちJAFS災害対応チームは、2年間にわたり2カ所の避難所で緊急支援を行い、その後は5カ所の仮設住宅団地で被災した皆さんをサポートし、各自治会長さんや役員さんと、住

民の皆さんとの対応に当りました。車中泊やテント泊、ビニールハウスでの避難、見なし仮設住宅など、対応は多岐にわたりました。

この支援活動が様々な団体、法人個人の皆さまから支援を受けました。私たちがその皆さまに代わり、被災された皆さんに可能な限り行き渡るようにと考えて活動をしました。

益城町役場から依頼を受け、避難所や仮設団地での新たなコミュニケーション形成を、何度も繰り返しました。今後建設される災害公営住宅でもコミュニケーションが作られることとなります。ここでもコミュニケーション形成の難しさと重要性が再び問われるのです。

私たちJAFSにできることは、この益城町での経験をたくさんの人と共に有し、新たな災害地やその他の地方で伝え、互いに防災について考え、今できることを準備することがいかに大切かを理解してもらう努力を重ねることだと思われま

す。

今後、大規模災害が起きた時の被災地への人員配置や、被災住民に目配りした対応などについては、今回の熊本地震への支援活動の経験を生かしたいと思っています。

この間、熊本で1000人を越えるボランティアにご協力いただき、たくさんの方の皆さまからご支援をいただきました。改めてお礼申し上げます。

また、避難所や仮設団地でご一緒に住んだ皆さんの皆さんがお元気でられることを、いつも願っております。

その後も九州北部豪雨、今年に入って7月の西日本豪雨など、各地が立て続けに災害に見舞われています。

毎年夏に和歌山県新宮市とJAFSが開いている「土と水と緑の学校」も、数年前の開催時に台風に見舞われ、子どもたちとリーダー、ボランティア全員が2日間、避難所での活動を経験しました。

その際、判断や対応を新宮市と十分に検討して、安全確保に最大限の注意を払いました。

「なんでもない毎日が宝物」  
本当にそう思います。

自然に恵まれた美しい日本、そして災害が多発する日本に暮す私たちは、過去の災害を教訓にし、未来にわたり自然を敬い、その心を大切にしていければと深く思うところです。

(JAFSスタッフ 山竹継男)



## 待つことなく安全な水得られる

コロンボから215km離れた人口1280人の村。自給農業や出稼ぎで生計を立てています。国や経済界が湾岸開発に力を入れているため、農業従事者が減っています。村には以前、数基の井戸がありましたが、維持管理が行き届かず干上がってしまいました。今まで壊れた井戸のたまり水を使っていましたが、乾季には遠くまで水を求めて行かなければなりません。寄贈井戸ができたおかげで水場が近くなり、待つこともなく安全な水を得ることができるようになりました。



南部州ハンパントタ県シテイナマルワ南部村  
受益者：125名(25世帯)  
井戸形式：露天式(深さ6m)

【寄贈者】城北ロータリークラブ様

ご寄付には  
税の優遇措置が  
受けられます

## なくそう貧困。命の水を！

井戸の寄贈にご協力ください。あなたの力がアジアの人々の命を助けます。ご寄贈者に完成報告書、写真、パネル写真を届け、現地の井戸に、ご寄贈者のネームプレートを設置します。

■井戸1基の建設に必要な費用■ (2018年4月現在)

インド=60万円      フィリピン=33万円  
カンボジア=28万円      スリランカ=22万円  
ネパール=17万円 (パイプライン=25~150万円)  
バングラデシュ=浅井戸22万円、深井戸55万円

※5年間のメンテナンス費、現地管理費を含む概算です。※現地資材費高騰により費用を1割増に変更させていただきます。ご理解ご協力をお願いいたします。

■お振込み先■ ・郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会  
・三菱UFJ銀行大阪中央支店 普通1968711 公益社団法人アジア協会アジア友の会

詳しくはアジア協会アジア友の会  
☎06-6444-0587へ

安全で衛生的な水を確保できないアジアの地域に井戸ができて生活基盤が整い、自立へ一歩踏み出せるようになりました。ご寄贈くださったみなさまに感謝申し上げます。

みなさんのおかげで  
井戸ができた村

【寄贈者】株式会社グローアップサード様

## 子どもが苦しみから解放

タケオ州ドーンケオ郡トラパンサラ村  
受益者：50名(11世帯)  
井戸形式：露天式(深さ32m)



302世帯、人口1249人。80%が農業で暮らし、鶏・豚を飼い、ヤシ砂糖売りなどで現金を得ています。農閑期には高齢者や子どもを除いてプノンペンに出稼ぎに出ます。井戸ができるまでは3.5kmも離れたため池の水が生活用水でした。水くみは高齢者には重労働なので水を買っていましたが、生水を飲むと子どもたちはすぐ下痢にかかります。貧しい農民にとって、病気は大変な負担です。寄贈井戸のおかげで今までの苦しみから解放され、安心して生活が送れるようになりました。

## 仮設住宅での暮らしに新鮮な水

約1000人の人口の半数をタマン族が占める村です。主要道路から離れているため流通の発展もなく、細々とした農業に頼っています。田畑も限られた作物しか採れません。2度目の大地震では甚大な被害を受け、今も仮設で暮らす人がいます。以前は農業用水をためる池がありましたが、だんだん水量が減って干上がってしまい、数時間かけて川まで水くみに行かなければなりません。ご好意により貯水タンクからの水道型水場が建設されました。心より感謝申し上げます。



シンドウパルチョーク郡インドラワティ村ネバネ地区/受益者：40名(8世帯)  
井戸形式：水道パイプライン

【寄贈者】天野貞男様

## 衛生環境が良くなり安心して暮らせる

【寄贈者】釜下良次郎様

人口584人。カンボジアの他村と同じくほとんどが自給農業で、鶏・豚の飼育が農閑期の季節労働で現金を得ています。井戸ができる前は、ため池の水を生活用水にしていました。水くみは女性や子どもの仕事でした。子どもは水を煮沸して使うことを知りません。トイレの普及率も低くて草むらで用を足すなど衛生知識は低く、下痢などの病気にかかることが多かったのです。安全な飲料水が容易に手に入って衛生環境が改善し、安心して生活できます。感謝の言葉もありません。



タケオ州トレアン郡ネアル村/受益者：41名(10世帯)  
井戸形式：露天式(深さ31m)

【寄贈者】認定こども園健爽学園ゆりかご幼稚園様

## 危険に遭わず清潔な水

中世のマッラ王朝時代に3つの王国があり、現在もその面影を色濃く残しているのがバクタプル郡です。カトマンズは首都として発展しましたが、こちらは郊外に位置しているため取り残され、昔の姿が残ったのです。ソウドウルは、その中心から5kmほど離れたネワール族の集落です。片道30分歩く川の水か、乾季には干上がるわき水を生活用水にしていました。山道で転倒して骨折することもありました。寄贈井戸によって10分ほどで危険もなく清潔な水が得られます。

バクタプル郡チャンクナランヤン町ソウドウル地区/受益者：300名(42世帯)  
井戸形式：露天式(深さ35m)





## 安全な水を確保でき感謝します

【寄贈者】青木加代子 様

自給農業で食べることはできて現金収入が少なく、村民はプノンペンに季節労働者として出稼ぎに出ます。これまで400m離れたため池の水を生活用水として使っていました。動物も糞尿をする水なので、病気になります。地区内のヘルスセンターや診療所に行くのですが、経済的・精神的に大きな負担です。経済発展が目覚ましい都会に出ていく若者を農村に留めるためにも、生活の改善が課題です。安全な水の確保は大事な条件の一つです。井戸ご寄贈に心より感謝申し上げます。



タケオ州トレアン郡ネアル村／受益者：40名（7世帯）  
井戸形式：露天式（深さ32m）

【寄贈者】天理教明城大教会 様

## 自転車・バイクできれいな水くみに

タケオ州トレアン郡ブレイスルック村  
受益者：31名（7世帯）  
井戸形式：露天式（深さ28m）



村人の大半が自給農業で暮し、家畜の飼育やヤシ砂糖売りや季節労働者としての出稼ぎで現金を得ています。トイレの普及率は50%で、多くは家の近くの茂みで用を足しています。家族全員が日に2～3回、徒歩で時間をかけて水くみに出かけますが、不衛生な水が原因の発熱や下痢が村人を脅かしていました。寄贈井戸は村から2km以上離れていますが、道が整備されており、自転車・オートバイで行くことができます。これからは健康な生活が送れます。心から感謝申し上げます。

## 若者が定着する新しい未来が開ける

【寄贈者】NITTOグループ 様

村人の86%は食べるには困らない自給農業ですが、家畜を育てヤシ砂糖売りなどで現金を得ています。生活に欠かせない水は動物が入り込むため池を生活用水に使っていました。高齢者は水を煮沸して使いますが、子どもにはそのような習慣はなく下痢などの病気にかかっていた。このような生活から脱却するためにも、井戸が必要でした。新しい井戸によって生活環境の改善によって病気の不安がなくなります。若い人も定着するようになり、新しい未来が開けます。



タケオ州トレアン郡トメイ村  
受益者：62名（11世帯）  
井戸形式：露天式（深さ21m）

【寄贈者】株式会社ユニコーン 様

## 農村改善への大きな一歩



タケオ州トレアン郡トラバアン・クノル村  
受益者：26名（8世帯）／井戸形式：露天式（深さ27m）

122世帯、人口532人。他の村と同じく自給農業で現金収入は少なく、家畜とヤシ砂糖売りや季節労働者として出稼ぎに出ています。若者は学校を中退して、経済発展が目覚ましい都会へ経家族のために働きに出ますが、持続的な仕事にはつきません。農村の安定した生活や教育環境を向上していくために若者の力は欠かせません。その一助となるのが井戸です。井戸寄贈のご支援は、農村改善への大きな一歩となります。ありがとうございます。

## きれいな水の大切さを知る

122世帯、人口532人。現金収入の少ない農民は、家畜を育て、首都へ出稼ぎに出て現金を得ていました。生活用水は動物も入り込むため池の水を使っていました。水くみは女性や子どもの仕事で、日に1～2回、バイクやカートで運んでいます。女性は水浴びのついでに水くみをしますが、きれいな水ではないので、下痢などの病気の原因になっていました。トイレの普及率もわずか10%。井戸のお陰できれいな水がいかに大切かを知ることができ、環境改善につながります。



タケオ州トレアン郡トラバアン・クノル村  
受益者：32名（7世帯）  
井戸形式：露天式（深さ20m）

【寄贈者】城北ロータリークラブ 様

## 都会に出た青年たちが村に定着

タケオ州トレアン郡ナムナクリーチェア村  
受益者：52名（12世帯）  
井戸形式：露天式（深さ32m）



村民の9割以上が自給農業で、鶏・豚の飼育やヤシ砂糖売りで現金を得ています。1kmも離れた寺の動物も入る池の水が生活用水でした。学齢児童は全員が学校に通っていますが、水くみは家族全員の仕事で時間がかかり、生活を圧迫していました。生水を飲むため、下痢などの病気にかかります。井戸ができ、水の不安から解放されます。子どもたちは水浴びができ、衛生観念が向上しています。高校を中退して都会に働きに行く青年も、村に定着するようになりました。



ロペアン村  
受益者：47名（10世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ33m）



ボンロー村  
受益者：46名（11世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ18m）



ボンロー村  
受益者：55名（11世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ16m）



ソーチャン村  
受益者：47名（12世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ29m）



ロペアン村  
受益者：71名（12世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ34m）



## 100基寄贈を達成しました

### 【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

イオングループ労働組合連合会さまが井戸を寄贈され、現地で井戸建設作業にも参加くださった、カンボジア・タケオ州トレアン郡の8村計17カ所から、感謝の手紙と写真が届きました。寄贈いただいた井戸は計100基となりました。どの村も自給農業で食糧を得るほか、養鶏・養豚、空き缶・プラスチック収集、ヤシ砂糖売りなどで現金収入をわずかに得ています。そのため自力で井戸を掘る資金はありません。農閑期には働き手は都市へ出稼ぎに行くため、遠くの井戸やため池へ水くみに行くのは女性や子どもの仕事でした。3km離れたため池の不衛生な水で暮らしていましたが、下

クラウン・トベア村／受益者：50名（11世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ20m）



痢から解放されます。（ロペアン村）  
トイレ普及率60%で衛生観念も希薄。動物が用を足す、ため池の水が原因の下痢がなくなります。（ボンロー村）  
水くみから解放され、衛生環境が改善し健康になり、教育も受けられれば若者が村に定着してくれます。（トメイ村）  
病気の不安や治療の経済的負担から解放され、水くみの負担も減って勉強や仕事ができます。（ソーチャン村）  
水浴する、ため池の水を飲むのが下痢の原因でしたが安心してできます。建設作業協力にも感謝します。（クラウン・トベア村）  
不衛生な水で病気になる、家庭にとって精神的経済的負担でしたが、安心して暮らせます。（ダウン・プー村）  
水くみにより子どもは学校へ行けず、女性は収入を得る仕事ができませんでした。学校へ行けず、女性は収入を得る仕事ができなくなりましたが改善されます。（トレパン・クノル村）  
井戸によって衛生環境が改善され衛生意識も高まり、健康な生活が送れるようになります。（プレイスラク村）

トラペアン・クノル村  
受益者：36名（8世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ26m）



プレイスラク村  
受益者：35名（7世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ22m）



トメイ村／受益者：43名（10世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ19m）



トメイ村／受益者：49名（9世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ22m）



トメイ村／受益者：58名（11世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ21m）



ソーチャン村／受益者：45名（11世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ30m）



クラウン・トベア村  
受益者：40名（11世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ24m）



ダウン・プー村  
受益者：54名（13世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ29m）



ダウン・プー村  
受益者：58名（12世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ27m）



トラペアン・クノル村  
受益者：39名（8世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ21m）



プレイスラク村／受益者：58名（10世帯）  
井戸の形式：露天式（深さ21m）





和歌山県新宮市高田で開催されている土と水と緑の学校（以下、土水）は今夏、第35回の節目の年を迎え、多くの皆さまの支えのもと、無事に開催することができました。今年も来年の再開を約束し、77人の参加者が無事に帰っていきました。

私と土水との出会いは、今から34年前の第2回土水に小学校4年生で参加したときでした。その後、第5回までは参加者として4年、第11回から今年まではリーダーとして15年、本部ボランティアとして10年参加させていただきました。全部合わせると今回は29回目の参加となり、今年も8月4日の準備から12日の片付けまでの全日程で参加させていただきました。

今回、他のボランティアの方から昔のことを聞かれることがあったので、今までの土水を振り返ってみました。私が参加者の頃は小学校も中学校も別の場所であり、中学校には吊り橋を渡って行っていたこと、大島さんという裸電球しかない寺子屋があり、昔は地元の方が地元で伝わる妖怪の話をしてくれたこと、今のようなドーム型ではなく運動会で使うようなテントを使っていたこと、第13回土水は0157の影響でリーダーだけの開催になった

# 親から子らへ「土水」35周年



新しいタイムカプセルを第35回の参加者とリーダーで埋めた＝8月11日、和歌山県新宮市、赤嶋崇さん撮影

に合わせて判断し、参加者に可能な限り安全にプログラムを楽しんでもらえるよう取り組んでいます。

今年は、10年前に埋めたタイムカプセルを掘り出しました。当時は看板を立てて写真も撮ったのですが、台風などの影響か、看板はすでになく、写真のみを手掛かりに探したので、掘り出すにはかなりの労力を要しました。また、掘り出したタイムカプセルを開けることがあんなに難しいとは思っていませんでした。今回の経験を踏まえ、今年埋めたタイムカプセルは、きつとすんなり掘り出せるものと期待しています。

一口に35年と言っても本当に長い年月です。これまでに多くの参加者が土水を卒業していますが、最近私がいりリーダーをしたときの参加者が親子となり、その子どもたちが参加者として土水に帰って来て来ています。親子2世代で土水に参加してくれていることを、本当にうれしく思います。私の子どももあと数年後には参加年齢に達するので、そのときはぜひ親子で参加したいと思います。

最後になりましたが、新宮市や地元の方々、参加者の皆さま、講師先生、本部ボランティア、リーダー、ジュニアリーダー、アジア協会の皆さまら土水に関わる多くの方々に感謝し、今後も土水に参加し続けたいと思います。  
（JAFS会員 赤嶋崇）

こと、本番中に台風が到来し、全員で避難した年があることなど、思い出せば数え上げればきりがありません。

中でも天候は、土水のような屋外の自然プログラムと切っても切り離せないもので、毎年本当に気をもむことの一つです。過去には、毎日雨が降ってプログラムが予定通りできなかつたり、

逆に毎日晴天続きでプログラムの上には気が遣ったりする年がありました。高田は晴れていてもホエールウォッチングを行う海上は波が高いつつ、晴れていてもそれまでの雨の影響で川の水量が増し、カヌーができないといったこともあります。その時々状況

## 日本・フィリピン共同で映画製作

### 現地の子どもも出演

#### 映画「セカミズ」撮影進む

2018年4月、私はマニラ北部の州、パンパンガにいた。容赦なく太陽が照りつける中、目の前では数十人の日本人がスコップやシャベルを持って、地面に幅5メートル、長さ20メートルほどの溝を掘っていた。ここは映画「セカイイチャイシイ水」マロンパティの涙」の撮影現場だ。

映画は今から約30年前、JAFSが主体となって行われたフィリピン・パナイ島パンダンの水道建設プロジェクトの実話を基にしている。日本の女子大生・明日香がフィリピンに行き、水道建設のボランティアに参加、地元の人やボランティアたちとの交流を通して、成長する様子を描く。主人公・明日香を演じるのは、オスカープロモーション所属の美声女ユニット「elton（エルフィン）」のリーダーである辻美優さん、プロジェクトの立役者であ

るJAFS会員・岩田さんを演じるのは赤井英和さんだ。監督は映画「チェリーボーイズ」の西海謙一郎が担当した。撮影は18年4月から6月にかけて、フィリピンと東京で行われた。

4月の撮影では、主演の辻さん、赤井さんを始め日本人キャスト・スタッフは現地のスタッフと共に9日間の撮影に臨んだ。ロケ地となったのはマニラから車で4時間ほどのパンパンガ州だ。1日目は屋外でボランティアが作業を行っている場面の撮影だ。撮影で使うボランティア現場は、重機で地面を掘り起こし、スタッフ自らがシャベルやスコップで掘り進めて作られた。

撮影開始から5日目には、水道を引く源泉「マロンパティ」を主人公・明日香が訪れる撮影が行われた。脚本でも重要なシーンであるため、監督を始めとしたスタッフのロケ地に対するこ



ロケ地で、主演の辻美優さん（中央）と記念撮影するフィリピンの子どもたち＝4月16日、フィリピン、パンパンガ州



アジア協会アジア友の会の  
『パンダン水道プロジェクト』を元にした  
感動の実話、遂に映画化!!!

# セカイイイチ オイシイ水

～マロンパーティの涙～

きれいな水を届けたい

製作快調!  
2019年  
劇場公開予定

映画初主演!  
**辻美優**  
(elfin')

映画「君の名は。」「SING/シング」などで  
声優を務め、美声女ユニット elfin' の  
リーダーとして活躍する辻美優が映画初主演!

国境を越え、  
パイプラインが繋いだ友情の絆。

日本とフィリピン両国のボランティア達の献身により、  
戦争の遺恨を乗り越え9年もの歳月を費やし完成した  
フィリピン・パンダンの水道建設工事にまつわる  
感動の実話を映画化!

エグゼクティブプロデューサー:湯川 剛 プロデューサー:山本祥生 企画:株式会社OSGコーポレーション 製作:セカイイイチ水製作委員会  
協力:公益社団法人アジア協会アジア友の会 制作:株式会社パラサング ©セカイイイチ水製作委員会  
株式会社OSGコーポレーション50周年記念事業 アジア協会アジア友の会40周年記念協賛事業 [sekamizu-movie.com](http://sekamizu-movie.com)

だわりは相当なものだったが、現地スタッフの努力のおかげでイメージにならう場所が見つかった。撮影場所は山奥にあり、スタッフ・キャストは車を降りて、重い機材を運びながら歩いて現場を目指した。撮影現場までは源泉の支流である川をいくつも渡るため、危うく濡れになるところだったが、フィリピン人のスタイリストさんが、辻さんを始めたとしてキャストと日本人スタッフのために長靴を用意してくれたおかげで、なんとか濡れずに済んだ。

7日目には明日香が村の小学校を訪ねるシーンの撮影が行われた。長期休暇中の小学校の教室を借り、村の子どもたちはエキストラとして出演した。長時間の撮影にもかかわらず、子どもたちは最後まで集中して撮影に参加していた。撮影終わりに子どもたちが辻さんからキャストと記念写真を撮ってもらった姿が微笑ましかった。スタッフ・キャスト一丸となったおかげで、9日目には撮影は無事終わり、日本人スタッフ・キャストは帰路に就いた。

この映画は実話を元にしていて、今から約30年前、JAFSの事務所へ一本の電話がかかってきた。電話をかけたのは、当時慶應義塾大学に留学していたフィリピン・パンダン出身のアマンテ氏だった。彼の出身の村では飲み水に海水が混じっていたため、村の人々が病気になることが多かった。彼は村に



キャストとスタッフが、ロケ地にパンダン水道建設プロジェクトの作業現場を再現した=4月15日、フィリピン、パンパンガ州

水道を建設するため、片っ端からあらゆる団体に連絡を取ったが、どこからも門前払いを受けていた。その時、最後の頼みの綱として連絡したのがJAFSだった。

電話に出たのは事務局長の村上氏だった。聞く耳を持たない団体が多い中、村上氏だけはもつと詳しい話を聞かせて欲しいと言った。

アマンテ氏から詳細を聞いた村上氏は理事会の承認を得て、フィリピン・パンダンへと飛んだ。だが現地を視察した結果、プロジェクトは当初の予定よりも多くの年月と資金を必要とすることが判明した。さらに、現地の人々の中には第二次世界大戦の遺恨から日本人に対して攻撃的な態度を取る人もいた。様々な要因が重なり、プロジェクトは難航した。だが、JAFSの会員さんとボランティアさんたち、アマンテ氏を含めた村の人々の熱い思いのおかげで4年後、遂にパンダンに水道を通すことに成功した。

この感動のドラマを書籍化したものが、小嶋忠良氏の「マロンパーティの精水」(PHP研究所)である。映画化はJAFS副会長・湯川氏の「プロジェクトに参加した人々へ恩返しをした」、また日本とフィリピンの若者に過去の遺恨を忘れて、アジアの未来のために協力してほしい」という強い思いを込めて実現した。映画化に際して、当時の状況をなるべく忠実に再現したいという製作側の要望を受けて、JAFSは内容の監修を行った他、数多くの資料を提供した。

6月には、東京での撮影も無事終わり、現在は公開に向けて編集の最終段階に入っている。映画「セカイイイチ水」(マロンパーティの涙)は2019年公開予定。

(株式会社パラサング 青木ありさ)





国内外の様々なイベントをHPに載せています。記事についてのお問い合わせはJAFSへ裏表紙にアドレス、連絡先

## 青少年の未来と AYSの発展願い チエロコンサート

アジアの青少年の未来のためのJAFSチャリティー・チエロコンサートを、ドイツのチエロ奏者のクラウス・ディータ・ブランドさんと大勢の演奏家の皆さんの協力で8月4日、大阪市のモーツァルトサロンでしました。写真。ユース・サミットを持続的に実施するとの願いを持った第5回の参加者たちが実行委員となりました。

その1人の大学1年生、長尾美保さんは「AYSの活動説明もさせていただきました。たくさんの方が寄付くださったことがうれしい。次の世代のために私が役立てる第一歩となりました。そして、司会という重要な役割を通し、たくさんの方と交流でき、貴重な経験をさせていただきました。初めて間近で聴くチエロなどの楽器のメロディーに感動し、とても楽しむことができました。この経験を今後に生かして様々なことにチャレンジしたいと思っています」と感想を寄せてくれました。おかげさまで13万円ほどのチャリテ

イ協力金が集まりました。協力してくれた皆さんに感謝申し上げます。(AYS実行委員 吉田暢子)

## 中国の文化や食とふれ合う



7月7日、毎年恒例の「テニス&アウトドアパーティー」をしました。あいにくの梅雨で、アウトドアではできません、室内のバーベキューとなりましたが、おいしい料理と楽しい会話を満喫しました。写真。参加者の中に中国からの女性留学生が4名。食事の傍ら、まずはJAFSの活動報告、次に彼女たちの出身地のプレゼンテーションを聞かせてもらい、中国各地の地図や写真に示された風土、文化、食の特徴を詳しく知ることができました。機知に富んだ質問も出て、参加者自

身の多文化共生への意欲をさらに深めました。今後も地区のネットワーク作りを目ざして活動し続けます。(JAFS富田林地区世話人 春田きよ子)

## 「みどりの遺言」 セミナーを開催

環境団体への遺贈寄付を提案する「みどりの遺言」セミナーが6月30日、大阪弁護士会館で開かれ19名が参加(東京・名古屋でも開催)。「みどりの遺言」は、日本野鳥の会、WWFジャパン、日本自然保護協会、気候ネットワーク、地球動物会議(ALIVE)、そしてJAFSが遺贈先となっています。

「ライフプランとしての遺言」というテーマで講演しました。子どもがいない方、障がいのある家族を持つ方などはもちろん、家族に委ねて何の問題もない方も、死後に自分の遺志が生かされる遺言は、生きた証を残す有効な手段です。少額であってもその人らしさが表れます。リーフレットは寄付力タログとしてもお知り合いに勧めやすいものです。ご希望の方はご連絡ください。(ikeda@asunaro-1.jp)。(JAFS理事・日本環境法律家連盟 代表理事 池田直樹)



## 植樹の話聴いて 二胡の調べ楽しむ

7月8日、第13回枚方ティーサロンを開きました。第1部は、長年JAFSの会員で様々なボランティア活動をしておられる平原栄子さんから、今年5月にフィリピンのルソン島南部の村で行われたマングローブ植樹の話をお聞きしました。何でも「続ける」ということはとても難しいですが、同時にとても大事なことでと実感しました。

第2部は、中国の伝統的な擦弦楽器「二胡」のミニコンサート。聴き覚えのある懐かしい日本の曲も多数演奏され、参加者も一緒に口ずさみました。二胡の哀愁をおびた澄んだ音色に、時の経つのを忘れて聴き入りました。(JAFS枚方地区世話人 天野由紀代)

## 起ち上げて5年 初めて井戸寄贈

JAFS尼崎井戸の会はこのたび、ネパールに1基目の井戸を贈ることができました。大好きなダンスをしながら国際協力ができたらいいなあと会を立ち上げ、5年が経ちました。一石二鳥とはよく言ったもので、ダンスパーティーの収益の一部を積み立てて念願をかなえられたのです。贈る側の喜び



と贈られる側の喜びが成立し、お互いが幸せになれると思います。6月30日、総勢145名が集って盛大なパーティーを開き、井戸の会の山本会長(写真中央)からJAFSの村上事務局長に(同左)に井戸の目録を贈呈しました。2基目の井戸の寄贈目指したいと思います。(JAFS尼崎井戸の会世話人 天野澄子)

## 宮川奈緒美さん招き 第4弾「社員クラブ」

第4弾「JAFS社員クラブ」が7月9日、大阪市天王寺区のホテルアウイナ大阪・レストランカステロで、44名が参加して開かれました。卓話者は、一般社団法人HPC代表理事で当会社員会員の宮川奈緒美さん。「波乱万丈の人生からの気づき」をテーマに、明るく語ってくれました。

宮川さんは、幼少期から親戚や知人の家に預けられ、転校を重ねる生活。アルバイトで生活し、大検を受検。留学、大学進学の後、結婚、離婚を繰り返しました。設立した会社も失敗し、負債十数億円を抱えた後、立て直し。さらに難病発症と、まさに波乱万丈の人生。完治を機に、生かされた命を社会に役立てたいと、児童福祉施設の子

どもたちの自立を支援する団体を立ち上げました。すべての子どもたちが能力を発揮でき、安心して暮らせる環境づくりが必要と訴え続けています。(JAFS寝屋川地区世話人 笠谷正博)

## マレーシアに親しむ 法人交流会を開催

6月20日、大阪市天王寺区のレストランカステロで、マレーシア政府観光局、マレーシア投資開発庁、マレーシア貿易開発公社の後援のもと、大阪国際フォーラム様と共催で、「マレーシアに親しむ法人交流会」を開催しました。

10月にマレーシアのペナンで第28回アジア国際ネットワークセミナーが開かれることにちなみ、マレーシアを身近に感じてもらえる機会になればとのねらいです。

マレーシアの後援機関からの7名を含む38名に参加いただき、マレーシアの文化・観光・経済・社会、マレーシアと日本の貿易事情、日本企業の進出状況などについて話してもらいました。海外からの投資プロジェクトと規模に応じて法人税が免除されるなど、海外企業の誘致に積極的な産業政策についてもご紹介いただきました。(JAFS法人賛助会世話人 北谷俊貴)

## ネパール井戸建設支援コンサート



ギターアンサンブルパートII (田口

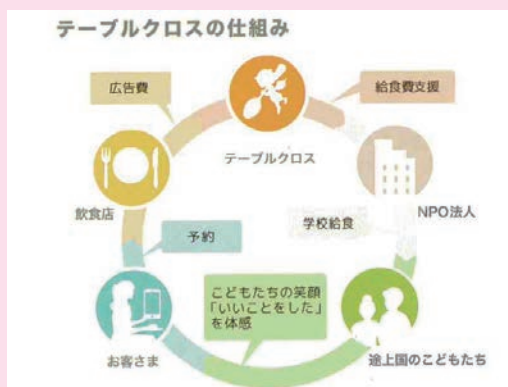


## 個人情報につき非掲載

### —募集—

地区担当スタッフ（非常勤）を募集します。詳しくは事務局までお問合せ下さい。  
TEL: 06-6444-0587  
E-mail: asia@jafs.or.jp

## 食べることからの国際協力～テーブルクロス



テーブルクロスは飲食店を予約するだけで途上国に給食を届けることができるグルメアプリです。アプリ内のレストランへの予約が成立すると、その人数分の給食が途上国のこどもたちに届けられる仕組みになっています。

JAFSは、テーブルクロスの提携団体となっています。あなたもテーブルクロスのアプリから今日の夕食を予約くださると、JAFSが支援しているネパールの子供達に一食協力できます。

「テーブルクロス」でインターネット検索、または左のQRコードから、アプリをダウンロードください⇒①お店の検索⇒②予約方法を選ぶ（電話or ネット予約）



# 里子の笑顔

勉強したくても経済的な理由で学校に行けない、進学のを絶たれる。アジア協会ではそんなアジアの子どもたちを里親制度で支援しています。今回はインドの里子の生活をお伝えします。

## コスモニケタン学園の生徒を訪ねて

J A F S が教育支援しているインドのビジャプールにある日印友好学園コスモニケタンの里子たちに会うため、学園から2.5時間離れたブルナプール村を訪ねました。学園に一番近い村の一つで、多くの生徒がスクールバス、自転車、徒歩で通学しています。

7月4日、村に到着。まず大きな給水塔が目につきました。その前には百以上はあると思われる水タンクや水がめが列ができています。

「これはいったい何？」

事前に読んで里子たちの記録には、登校前の仕事として「村の共同井戸に水をくみに行くこと」があげられていました。自前の井戸を持つ家庭はほぼありませんが、共同井戸に行きさえすればくめるものだと思っていました。

ところが、水をくみ上げるのに必要なモーターの電力供給は夕方5時から10時までの5時間。電力不足のインド



の多くの地域では電力供給は時間制限があります。なるべく早く水をくもう

### 「アジア里親の会」 里親募集

- 対象国はインド、カンボジア、ネパール、バングラデシュ、フィリピンです
- 会費は里子1人年額20,000円。複数も可です
- 里親には、里子の写真や成長記録をお届けします

と、ポリタンクや水ガメを置いて順番を取っているのです。給水は家族の人数によって割り当てられ、1家族当たり水がめ10から15個まで。その水で生活のすべてをまかなっているとのこと。給水可能な時間になると、一家総出で水を運びます。

### 多くの親が日雇い労働

最初に訪ねたロヒニちゃん(12)の上の写真Ⅱは6年生。この村では雇用されるような職場はなく、多くの村人は建設現場などで肉体労働に従事する日雇いのクリー(出稼ぎ)として働いています。ロヒニちゃんの両親もそうです。1日の稼ぎは100〜200ルピー(約160〜320円)。大変貧しい家庭です。ロヒニちゃんの好物はチャパティ(インドのパンの一種)。これは言ってみれば「好物はお米のごはん」というのと同じです。食事の貧しさがかげがえします。

ハイスクールの姉や同じ学校に通う兄もいます。両親とも満足な教育を受けていないため、子どもたちにはできるだけ教育を受けてほしい、と願っています。自分たちの力では教育費は賄えないため、J A F S の里親制度にとても感謝していました。ロヒニちゃんの将来の夢は教師になることです。もちろん水くみも帰宅後に手伝っています。母親は部屋の片隅を指し「2カ月前に祖母がここで亡くなった」と悲



しそうな顔で話してくれました。

### 少ない部屋数に大家族

次に訪ねたのは8年生のラクミニちゃん(13)宅。なんと父親は21年前に開校したコスモニケタンの中学校の第1期生でした。一緒に訪問した田中壽美子さんを覚えていらっしゃるでしょうか、一緒に記念撮影Ⅱ左の写真。田中さんは元J A F S スタッフで、コスモニケタンの開校前から何度も現地を訪問しているのです。

父親は家が貧しくて高校には行けなかった。他の村から嫁いできた母親も

### まだまだ狭い将来の道

中卒。娘にはぜひ大学まで行かせ、教師になる夢をかなえさせてやりたい、と話してくれました。家族は大家族と一緒に暮らす結合家族で、両親と1年上の兄、祖父母、叔父、叔母ら計15人が暮らしています。村の他の家に比べて大きな家ですが、それでも部屋数は3間でした。家族は小さな農地を所有していますが、それだけでは食べていけないので、多くがクーリーとして働いています。家は奥に長く続く造りで、一番奥が豆やコメの倉庫兼作業所。祖父と叔母が豆の皮をむく作業中でした。

隣のマドバビ村に住む7年生のソジャール君(12)を訪ねました。母親と二人で迎えてくれましたⅡ左上の写真。貧しい村ですが、最近少しずつ綺麗な家が増えていきます。そんな中、ソジャール君の家は、ひときわ粗末なブロックとトタンだけで一間きり。トイレはありません。家族は両親と兄。父親が酒飲みで、稼ぎはすべてお酒に消える。母親のクーリーとしての稼ぎでは2人の子どもを養えず、兄は祖父母宅で生活しています。

ソジャール君は早朝から夜まで働く母親を助け、家事の多くをこなしています。夜には水くみの列に並びます。食事は日に1度しかとれないこともあります。貧しい家庭の事情を母親が話すのを、どんな思いで聞いているのか。胸が痛くなりました。

口数は少ないが、頑張り屋のソジャール君。将来の夢は教師になることです。頑張りソジャール君!

3人の里子の将来の夢はすべてが「教師」です。この地の里子たちの知っている職業は教師、医師、警察官ぐらいいので、とりあえず身近な職業を将来の夢としてあげるのだと思います。豊かな国の子らが夢見るIT技術者、サッカー選手、ケーキ屋さん、パイロットなどは、縁遠い世界なのです。(編集スタッフ 大本和子)



## アジアの友から



ネパールのチョータラ病院産婦人科棟で1995年建設時から働いています。A F S ネパールのボランティアメンバー。看護師・助産師として日本で研修を受けたこともあるビマラさんの今をお知らせします。

結婚して5歳の息子がいます。主人がカトマンズの産婦人科病院に勤めている関係で、私もカトマンズに転勤しバクタプール病院に勤務しています。初めは産婦人科担当でしたが、昨年より結核科担当です。

今は残念ながら助産師としての仕事ができませんが、結核科からネパールの課題を山ほど見ることができています。結核は現在では、薬を3カ月間きちんと飲むと完治する病気ですが、少し良くなると薬をも

## 「自立の力」をつける支援をください

らいに來なくなり、調子が悪くなるとまた病院に來ます。薬をやめている間に他の人に感染する危険性を理解していない人が多く、教育不足を痛感しています。

今のネパールは、地震被害後に国際支援を受けたことで国際スタンダードなどが導入され、向上した点もたくさんありますが、以前より自立できなくなった部分も多くと感じています。今の問題を解決するには何をどうすべきなのか自身で考えなければいけないのに、外からの指示をまず待っている。それでは本当の解決にはなりません。ネパール人のためを考えるなら、自立の力をつけるような支援を、どの国もどのNGOもしてほしいです。

A F S の活動は地に足がついていると思っっています。今、私の故郷チョータラも復興途中ですが、いろいろな話が浮上しています。今後、皆にとつて本当に良い地域づくりについて仲間としっかり話をして、これまでチョータラを支援して下さった皆さんに新生チョータラを見てもらいたいです。私の使命である母子保健についても、母子がお産に主体的になる活動を始めたいです。

A F S ネパール ボランティア  
看護師・助産師  
ビマラ・ナピット



## 広告を通じて「人と企業の成長をお手伝い」



大阪市中央区瓦町 4-4-8  
瓦町4丁目ビル5階  
☎ 06-6229-2525  
HP <http://growup.co.jp>  
代表取締役：米田明正

創業以来56年。電車内のポスターやステッカー、ガイド放送、駅の看板やデジタルサインなど、関西のあらゆる電鉄の広告を取り扱う、交通広告専門の広告代理店です。広告をベースに「人と企業の成長をお手伝い」するものが、弊社の事業目的です。また、企業理念の一つに、「多くの人の役に立つ」が

あります。その一環として、アジア協会さんを通じてアジア各国に井戸の寄贈を行っています。現在までに38基。100基を目標に、達成に向けて頑張っています。

井戸の設置や里親の報告など、現地からの喜びと感謝のレポートを拝見する度に、会社の皆で我がことのように喜びを分かち合っています。

会社のエントランスに井戸のパネル写真を展示していますので、ぜひお立ち寄りください。

企業や労働組合、各種団体は、それぞれの理念に基づいて活動していますが、いろいろな形で社会の役に立ちたいという気持ちは私たちと同じです。アジア協会アジア友の会の理念にご賛同、ご協力くださっている法人会員を紹介します。

## 新・The 社会貢献

## 常にお客様の視点で



大阪市北区天神橋 2-3-3  
☎ 06-6357-3434  
HP <http://www.hattori-ao.com/>  
代表取締役：服部 貢

工場・学校（写真）・病院・福祉施設・オフィスビル・公共建築などを中心に、建築設計監理・リニューアルなどを行う総合設計事務所です。昭和47年の創立以来、創業者の服部貢の思想である「常にお客様の視点で」を心がけ、一貫してお客様に対して真摯な姿勢を貫いて参りました。これまでに手掛けさせて

いただいたプロジェクトは国内外で800件を超え、多くの分野にて業績を残しております。

当社は上記のイデオロギーによって、お客様が考えられる顕在的なニーズと、気づいておられない潜在的なニーズの双方を引き出し、最適な建築物の創造を実現することができるプロフェッショナル集団です。

これからも豊富な実績と確かな技術力に基づき、常に施主様の視点に立った建築物の創造を目指して参ります。

## ●環境コラム●

この夏は自然災害が続きました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。猛暑から始まり地震、豪雨、台風。地震のほかは地球温暖化の影響が本当に始まっているのだと実感せざるを得ない状況であり、気象の専門家も地球温暖化が背景にある異常気象だとしています。

さて私の住む市では、家庭ごみは市の指定ごみ袋で出すことになっています。この袋は今まで普通の石油由来プラスチック製だったのですが、今夏10%変化しました。プラスチックのうち10%は植物由来のプラスチックを混ぜ

### 石油から植物へ

た袋が使われるようになったのです。これにはどんな意味があるのでしょうか？地球温暖化の原因となる二酸化炭素の排出を10%抑える効果があります。燃やした際にごみ袋から二酸化炭素が出るのは、どちらのプラスチックでも変わりません。ですが植物由来プラスチックから出る二酸化炭素は①もともと大気中の二酸化炭素を吸収し光合成で作られた植物体が燃やしても一度大気中に返ることに

た場合、実質的に大気中の二酸化炭素を増やしていないと見なせるからです。対して石油由来プラスチック。石油は億年単位の過去に、地上の植物など生物

が燃えて出る二酸化炭素は億年前の生物由来、すなわち億年前の大気中の二酸化炭素です。燃やして出た二酸化炭素も一度石油に戻そうと思えば億年必要、つまり実質上石油に再循環できません。大気中の二酸化炭素は増える一方です。数十年ローンなら人間の寿命の内に返済できますが、数億年ローンは人間の寿命どころか子々孫々も含めた未来の人類

すべての時間的範囲でも返済しきれませんから、普通そんな借金はしません。ですが返済見込のないほど大量の二酸化炭素を出して、地球と未来世代に借金を負わせているのです。自分の寿命を超える長年の過去から地中に隔離されている資源をわざわざ掘り出して使い捨て（借りっぱなし）にすることはできるだけ控え、地上に既にあるものを人間の寿命の範囲内で循環させて使う方向を目指すのが、地球や子孫に負荷を残さないことになり

ます。プラスチックごみを減らすため紙（植物由来）ストローを使う近頃の動きも、二酸化炭素排出削減という地球温暖化対策の意味からも環境負荷が低いのです。（JAF Sスタッフ 川本裕子）

## チャリフェス開催予告

第3回アジアンチャリティフェスティバル  
アジアの人たちと一緒にアジアの食とエンタティメントを楽しみましょう！  
●11月24日(土) 11:00-20:00  
●於: 立正佼成会 大阪普門館 4階ホール (大阪メトロ肥後橋駅 徒歩3分)  
●参加費: 前売券2千円(クーポン券付)

## 入会のご案内

皆さまが会員となつてサポートして下さることで、安定した活動計画ができます。継続した活動をしていくためにも、ご協力をお願いいたします。

- A. 維持会費 年額1口 12,000円 (月額1,000円)
  - B. 賛助会費 年額1口 6,000円 (月額600円=振込手数料含む)
  - C. ジュニア会費 (高校生まで) 年額1口 1,000円
  - D. 団体会費 年額1口 20,000円
  - E. 法人賛助会費 年額1口 50,000円
- 会費・寄付の振り込み先**  
郵便振込 00960-6-10835  
三菱UFJ銀行大阪中央支店 普通1968711

## 編集後記

**東**の野に炎(かぎろひ)の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ。この夏、柿本人麻呂の歌碑がある奈良県宇陀市の公園を訪ねました。小高い丘に立ってほのか万葉の時代に思いをはせ、しばし暑さを忘れました。(敏)

**ア**メフト監督の反則指示、ボクシング連盟会長の専横、女子レスリングや女子体操のパワハラ、アジア大会男子バスケット4選手の買春など、スポーツ界で問題続発。世界の若者が2年後集うのにふさわしい国? (督)

**記**録的猛暑による死亡者続出の夏。記録的大雨による洪水と土砂災害。記録的な強風の台風で大規模停電や関空閉鎖。直後に北海道全土で地震と停電。日本列島が壊れてしまうような恐怖を感じています。(和)

**10**月開催の国際ネットワークセミナーのテーマは「気候変動と貧困問題」。まさに今夏は多くの地震と巨大台風が襲われ、気候変動を実感しました。いかにこの問題に連帯できるか、セミナーでの議論が楽しみです。(裕)

**時**間に始めと終わりはあるのか(最新の物理学によるとあるらしい)。宇宙に果てはあるのか(これもあるらしい)。とりとめないことを考えて夜空を眺めていると、残暑だけでなく身辺の些事も、しばし忘れられます。(黒)





募金にご協力をお願いします

アジアの安全な飲料水がない地域で  
貧困に苦しむ人々を支援する活動に使われます

郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会



▲幼子を背おいクワや弁当をかつぎ、山の反対側にある畑へ向かうまだ低年齢の母親＝ネパール、ドラカ郡カリンチョーク

◀表紙の写真 男性たちが太鼓をたたいて訪問客を村にいざなった後、正装した女性が訪問客の足を洗い、祝福のしるシティカを額につけるヒンズー教儀式＝6月29日、インド・マハラシュトラ州ガッチロリ郊外のマハワラ村。4～9頁にインド訪問の特集記事

編集・発行：公益社団法人 アジア協会アジア友の会

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-2-14 肥後橋官報ビル5階

☎ 06-6444-0587 FAX 06-6444-0581

URL：https://jafs.or.jp E-mail：asia@jafs.or.jp

2018年10月 135号 発行人：萩尾千里 編集人：村上公彦

広報企画委員長：法花敏郎

編集アドバイザー：松本 督、黒沢雅善

編集スタッフ：岩崎準一、大本和子、柿島裕、金井英夫

川本裕子、永井博記

印刷製本：あさひ高速印刷株式会社